「教育県大分」創造に向けた地域別意見交換会 in 九重
開催概要

［開催日：令和６年７月５日（金）］

［学校訪問］ 九重町立ここのえ緑陽中学校
［訪 問 者］ 大分県教育委員会（山田教育長、教育委員、教育次長　他）
九重町教育委員会（時松教育長、教育委員、課長　他）

１. 概要説明

九重町立ここのえ緑陽中学校は、東飯田中・野上中・飯田中・南山田中を統合し、平成２５年４月に開校した。今年度は、「ともに生き、学び、磨き合う生徒の育成～だれ一人取り残さない～」を学校の教育目標に掲げ、目指す生徒像として、「学び続ける自立した学習者」「ふる里に学び、将来ふる里を支える生徒」「自他ともにウェルビーイングを追求する生徒」の３つを設定している。

また、平成２８年度に学校運営協議会（CS）を設置し、「地域とともにある学校」「学校・家庭・地域の協働」「ここのえ学園の中心として、地域の活性化」を目的とした取組を進めている。

ここのえ緑陽中　佐藤校長

２. 特色ある取組

（1）ここのえ学園構想の集大成

ここのえ学園構想とは、町内にある２つのこども園・６つの小学校・１つの中学校・４つの公民館・文化センターを１つの学園と捉え、密接な連携・切れ目のない教育を行うことを目的としている。切れ目のない教育の１つとして「ここのえ学」がある。総合的な学習の時間を活用して、九重町を知り、未来を考える学習を行っている。生徒は学習を通して、情報を比較・分類・関連づける・多面的に見る・構造化する・抽象化する等、探究の過程に応じた技能を身に付けている。

（2）台湾との教育交流

令和元年１２月９日に大灣国民中学・凰山国民中学と姉妹校提携を結んで交流が始まった。これまでに３回訪問し、外国の文化に触れ、ホストファミリーとの交流を行ってきた。台湾との教育交流は、生徒たちが将来の夢を持ったり、成長した自分を見つめ直したりするきっかけとなっている。

３. 授業参観後の意見交換会（主な意見）

・対話型の授業について：１人１台端末の導入により、生徒一人一人に適した学びが進められるようになってきた。先生は見取りをする時間が増え、授業形態にはこだわらなくなってきている。
・高校への進路の様子について：令和５年度は、地元の玖珠美山高校に約半数の生徒が進学している。日田市の高校へは２０名ほど、大分市内へは４～５名が進学している。
・数学の取組について：中２から１つのクラスを２つの教室に分けて授業を行っている。さらに、放課後の時間を個別指導にあてている。
・いじめ対策について：アンケートや教育相談等を積極的に設けており、生徒が先生に相談しやすい環境を整えている。また、生徒の様子を細やかに見取りながら見守っている。
・生徒たちは素直に話を聞き、とてもよい雰囲気で学習を進めている。

１人１台端末を用いた授業の様子

意見交換会の様子

［意見交換会テーマ］「芯の通った学校組織」を基盤とした教育水準の向上
～児童生徒数の減少を踏まえた、地域の学校の取組について～
［出　席　者］　　学校訪問参加者及び学校関係者

１. 九重町の取組説明

（1）児童生徒数の推移について

九重町の出生数は、平成１４年度から平成２９年度まであまり変化がないが、令和２年度から令和５年度にかけて大きく減少している。さらに、令和１２年度の小学校の人数は、町全体で２２１名となることが予想され、令和６年度と比較すると約４０％減少し、小学校６校の内、４校が複式学級で授業を行なうことになる。学校が児童生徒数の減少を解消することは難しいが、少人数を活かした特色ある学校づくりを進めている。

（2）九重町の特色ある学校づくりについて

九重町の小学校５・６年生は、学年毎に全員が集まって学ぶ「集合学習」を行っている。「集合学習」を通して、大人数での話し合いや集団活動を経験している。地域がとても協力的であり、地域が学校に声をかけ地域主体の活動も進められている。また、複式学級については、複式の利点を利用して子どもの主体性や子どもどうしをつなぐ学びを進めている。

（3）九重町親子山村留学モデル事業について

野矢校区活性協議会と野矢小学校が、親子山村留学制度を導入することにより、地域や学校の活性化が期待できると考え、九重町に導入の要望を行った。また、県外の先進校へ視察に行き、人口減少に対して学校が地域と一緒に何か取り組む必要性があることを強く感じた。取組は始まったばかりであるが、今後、野矢校区活性協議会と野矢小学校が協議して、体験活動や具体的な取組について考えていきたい。

２. 意見交換（主な意見）

（町）小学校の統廃合を進めていくと地域にかなりのダメージが残ってしまう。人数が減ったから統廃合ありきという考え方より、個別最適な学びをしながら、何が１番よいかを教育委員会で議論する必要がある。また、「ここのえ学」の学習を通してふる里を大事に思う心を育てていきたい。

（県）学校の目的や授業の在り方を見たとき、子どもたちが切磋琢磨して社会的な感性や学力・体力等を身に付けていくと考える。

（県）山村留学で町に移住するには、行政の補助や、雇用の確保がかかせない。また、人口減少を防ぐには、いかに子どもたちが地元に戻って就職するかが重要になる。例えば、地元に戻って就職する等の条件で、大学進学に補助金を出す取組も考えられる。山村留学制度を高校まで進めたり、農業支援等も含めたりして、ダイナミックな改革を進めてもらいたい。

３. 意見交換を終えて

・時松教育長より

人口減少に伴う少子化は避けられないが、保護者や子どもたちが九重町に住んで九重町で学ぶ選択をする限り、誰一人取り残さないという思いは貫きたい。野矢小学校の親子山村留学の取組を通して、「地域と学校が力を合わせる」「家庭や子どもたちの居場所となり一人でも多くの子どもたちを救う」という思いを大切にしたい。野矢小学校の取組が他の５校に広がることが理想であり、今後の目標と考えている。

時松　町教育長

・山田教育長より

全体を通して、みなさんが郷土愛に満ち、九重町のために一生懸命考えていることがわかった。子どもたちにその思いが伝わり、生き生きと学習する姿に感銘を受けた。私たちは、６年後の児童生徒数減少の現実から目をそらしてはいけない。学校は何のためにあるのかを考えたとき、１番は子どもたちのためである。みんなで議論し、どうあるべきかを考えてもらいたい。

山田　県教育長